

居住地周辺の身近な森林と 住民の意識

北海道支所 北方林管理研究グループ 高橋 正義

都市部やその近郊にある森林は、暑さ寒さを和らげたり、遊びやレクリエーションの場となるなど都市住民の生活環境を快適にしてくれる役割を果たしている。しかし、このような森林は都市化に伴って住宅や工業用地などへ開発・転用され、減少しつつある。また、残された森林も、落ち葉や薪炭などの需要が激減したことによって利用価値を失い、管理放棄されているものが多いことから、都市部やその近郊にある森林は、地域における社会的要望に応え、森林の持つ多面的機能が発揮されるように配置し、保全、管理すべきである。そこで、居住地周辺の森林に対する住民の意識と居住地周辺の森林の分布面積との関係について解析した。

ある程度森林が残されているが都市化の進む埼玉県所沢市の住民2,000人を対象に、住民の森林に対する意識に関するアンケート調査を郵送法によって行い、729人から回答を得た。住民が身近に感じる範囲は徒歩で5分以内とする回答が最も多く、時間が長くなるに従って減少する傾向が見られた。また、9割以上(94.9%)が30分以内と回答していた(図1)。歩行速度を4km/hと仮定すると、身近に感じられる範囲は最大でも半径2km程度であると考えられた。さらに、回答が得られた住民一人ひとりについて、その住民が回答した範囲内に実存する森林の量を土地利用図を使って把握し、住民の回答と比較した。「まったくない」と答えた住民は、森林の少ない環境に居住していた。「あまりない」、「ある」となるにつれて実存する森林の量も増え、「たくさんある」と答えた住民が最も森林の多い環境に居住しているという結果が得られた(図2)。

以上のことから、住民にとって身近な森林とは、居住地からおおむね半径2kmの範囲内にある森林であり、住民の森林の量に対する意識は実存する森林の量を反映していることが明らかになった。

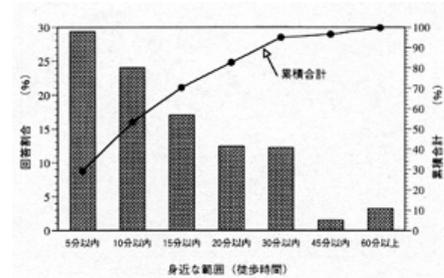


図1. 身近に感じる範囲に関する回答

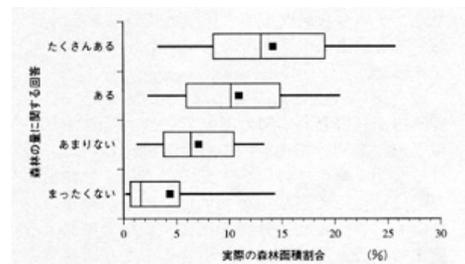


図2. 身近に感じる範囲内の森林の量に関する回答と現実の森林面積割合
ボックスの左, 中, 右線は, それぞれ小さい方から25%目の値, 50%目の値, 小さい方から75%目の値を, ボックス内の点は平均値を示す